

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 1日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520087

研究課題名（和文） 説教原稿より探る、クザーヌスの根源洞察における基礎概念の変容

研究課題名（英文） Development of Cusa's concept of principium —— from research into his sermon drafts

研究代表者

佐藤 直子（SATO NAOKO）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：60296879

研究成果の概要（和文）：本研究は、クザーヌスの根源概念である一性概念の変容を、説教原稿から追っていくことを目的としたものであった。説教原稿に注目したのは、高位聖職者が自ら説教を行うことは異例であるにも関わらず、クザーヌスの批判校訂版全集のおよそ3分の1を説教草稿が占めており、著作ごとの彼の根源概念の変容とその意味を、間断なく行われた説教の原稿から時代順に追っていくことができる、と考えたからである。さらにクザーヌスが時代を導く教会政治家であったことに鑑みれば、説教に彼の体系を差し戻すことで、著作の体系的構造がいかなる枠組みのなかで当時の世界に活かされるかを浮き彫りにする、とも予想された。一連の研究を通しての主要な成果は、彼の一性概念が協和的一から絶対的一へと変容するにあたって、クザーヌスが一性を同一性と同定し、かつそれを絶対的の同一とする背景には、プロクロス的一性理解の批判的超克があったことを明らかにした点である。プロクロス的な関係性を超絶した一性が、「分有されうるもの」を自らの内に含んだ一性となることで、一性と同一性の同定が可能となり、一性は創造根源を示す概念となりえた、ということの本研究は指摘することができた。また、クザーヌスの説教は救済史的な背景を持って語られるが、そこではアリストテレストマス的なハビトゥス形成の人間論が挿入されている。この中で創造根源の絶対性は、人間が自らの、また自らが属する集団のハビトゥスを相対化する範型として機能していることも明らかになった。一性概念が明確に同一性概念と同定されることは存在論の起点を築くのみならず、ハビトゥスがまさにそれに向けてのハビトゥスである起点の確定でもあることを指摘しえたことも、本研究の成果であった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to trace the development of the concept of principium in Nicholas of Cusa's philosophy by research his sermon drafts. Most important his concept of principium is unity. In Cusa's thought, unity is not only the principium of the creation, but also the principium of human mind too. Though Cusa was a high rank clergyman, he preached by himself, so Cusa's sermon drafts actually comprise approximately one-third of his complete works. Therefore in this study, our decision was to focus on these drafts. Because, he had preached continuously, his sermon drafts would enable us to closely follow the chronological development of the concept of unity. In those sermon drafts, we can find that his concept of cooperative unity evolved into absolute unity, and he came to consider unity as the same as identity which he saw absolute identity. One of important conclusions of this study is that behind this delicate change of concept of unity lies a critical text-study of *Proclus-latinus*, and Proclus' concept of unity. For Proclus, unity transcends relation, therefore "imparticipabile", so it is not identity. But Cusa's concept of unity includes "quod paricipatur", so as self-identity, it includes self-relation. Thereby, the unity includes the moment of "participabile", therefore it can become the principium of creation and human mind. Furthermore, from Cusa's sermon drafts, we found that he had preached commonly within the context of the salvation history. In this context, he used the concept of "habitus" which had used in the ethics or philosophical anthropology of Aristotle and Thomas Aquinas. Therefore, as a conclusion of this study, we assert that Cusa's

fundamental concept is absolute unity, and he got it from critical reading of *Proclus-latius*, but in his preaches — in there, he expressed his thought for his contemporaries—, in order to make audience to turn to the unity, he used this concept of unity in the framework of the concept of “habitus”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野： 哲学

科研費の分科・細目： 哲学、思想史

キーワード： キリスト教的神秘主義、西洋中世思想、説教、概念史、根源、神名称、一性、同一性。

1. 研究開始当初の背景

(1) 中世哲学から近世哲学の変容は、これまで靈魂ないし精神観、存在観、対象観の側面でなされてきた。素朴な实在論からの脱却という側面から中世哲学を批判する近代的思惟に対して、中世思想研究は、すでにして中世哲学および中世思想は超越論的視点を持ち、そこからの論理学の展開、体系構築、脱体系の動きが行われていたことを明らかにしてきた。

(2) しかし、「現実」「可能」「一」「同一」「他者」といった根本概念の内包が、時代を追ってどのように変容していったかについての概念史的考察は本邦では十分になされていたとは言いがたい。そこで、こうした根本概念——それは存在論的・超越論的根源についての概念と重なるものとなるが——の意味内容の変容について、何らかのモデルを取り上げて、その次第を追うて行く研究が必要である、と考えた。

(3) モデルとして選択されるのは、15世紀前半の思想家ニコラウス・クザーヌス(Nicolaus Cusanus 1401-64)であった。研究代表者は長くクザーヌスの研究に当たっていた。そこからの知見によれば、時代的にはルネサンス期に生きたクザーヌスには、古代・中世の多様な思潮——プラトン主義と新プラトン主義(アラブ思想を含む)、東方神学の伝統、初期スコラ学、修道院神学、アリストテレス受容によって開花した盛期スコラ学、14世紀の唯名論——が流れ込んでいる。そこには、彼が修学期にイタリアで人文主義的素養を身につけ、折に触れ、古文書、写本を収集し、場合に知己に翻訳依頼をしつつ、これらを読んでいた、という事実がある。

(4) 彼は大学人として生きることを選択し

なかったため、その思想は彼の蒐集した原稿とともに、言わば「水脈」的な在り方で後代に影響を与えた。エックハルトを始めとするドイツ神秘主義的思惟が近代で再評価されるのは、生地ベルンカステル・コースに彼自身が設立した養老院クザーヌス・ホスピタルに所蔵された、神秘主義者たちの説教等の手稿の発見による。

(5) クザーヌス自身の思想また彼が蒐集した手稿に見られる人間精神に見られる反省的思考が、17世紀の大陸合理論、18世紀のドイツ観念論へと汲み取られていったことに鑑みれば、彼の根源概念についての思惟は西洋中世と近世の思惟を架橋するものと考えられる。

2. 研究の目的

クザーヌスの哲学・神学的著作は、1440年の *De docta ignorantia* に始まるが、そこで用いられる根源概念は、1433年執筆の *De concordantia catholica* に見られるそれと内包の変化を見せている。さらに、彼の根源概念は1446年の *De genesi* において、後期の根源概念(これはそのまま神名称となる)の原型的な構造を持つに至る。その起因を探ることが本研究の目的である。この目的のもとにある個別的な目的を以下に列挙する。

(1) クザーヌスは教会政治家として、時代の最先端に立って、当時のキリスト教界を導いていた。そのため彼の「著作」は激務を縫って記されたものであり、内容的には確固たる体系性を持ちつつも、比較的短いものが多い。この「著作」で機能する根源概念の内包をより正確に探るために、当該著作が執筆された前後になされた説教の原稿を探り、そこでの概念の機能仕方を吟味することが一つの目

的であった。

(2) バーゼル公会議出席中の1433年に執筆された教会政治的著作 *De concordantia catholica* と *De docta ignorantia* の間には約7年間の空白期がある。その間には彼の教会政治上の立場は公会議派から教皇派に転ずるのだが、その転身の背景には彼の一性理解の深化が伺える。「著作」がない時期のこの深化を、すでに1430年より始まっている「説教」の原稿から探ることが本研究の具体的な目的の一つであった。

(3) さらにクザーヌスが後期の根源概念を確立する *De genesi* 前後の、つまりは1450年前後の説教に、確固たる同一性構造を持つ根源、また超越論的・存在論的「根源」にふさわしい根源概念の確立を探ることも、本研究の目的であった。この根源概念は、クザーヌスの全期著作の「隠れたる神」としての根源概念から、「顕現する神」としての根源概念への変更を説明できるものであるか否かを探ることもまた、本研究の目的であった。

(4) 根源概念はそれぞれ思想史的、概念史的背景を持つが、クザーヌスがいかなる思想源泉から自らの根源概念の内包を順次更新していったかを探ることもまた目指すべきものであった。

(5) 彼が教会政治家であったことに鑑みれば、彼の体系は実際に彼が生きた時代に世界の範型を示す役割を果たしていたはずである。この範型を実際に司牧で活用するためには、著作で示されている以外の概念枠が作用している可能性があり、これを説教原稿から探ることも必要であった。

3. 研究の方法

(1) 研究目的に鑑み、1430年より1441/45年の説教の解明を行い、彼の根源概念——とりわけ一性概念——が、いかに機能しているかを考察した。

(2) *De genesi* における一性概念、とりわけ *unum absolutum* についての考察を行った。

(3) *De genesi* における一性概念の特異性から——*absolutum* という形容が根源に冠せられたのは思想上これが初めてである——、*De genesi* に先立つ説教群から、*unum absolutum* の先取りになる概念を探り、改めて *unum absolutum* の持つ意味合いを考察した。

(4) 説教原稿における根源概念の内包を考察するにあたり、クザーヌスの批判校訂版 (*Nicolai de Cusa Opera Omnia*, vols. 16-20) のテキストから、彼の説教邦訳を行った。

(5) 邦訳作業にあたっては、批判校訂版に記載された源泉を入念に調べ、思想的連関をも考察した。

(6) クザーヌスの一性概念の形成史を辿るにあたり、*Proculus Latinus* とクザーヌスの関わりを調査した。その際に、K. Bormann

(hrsg.), *Cusanus-Texte*, III, 2, 1; H. G. Senger (hrsg.), *Cusans-Texte*, III, 2, 2 を基本資料とした。

(7) 主要著作、また主な説教がいかなる状況のもとになされていたかは、クザーヌスの文書記録 *Acta Cusana Quellen zur Lebensgeschichte des Nikolaus von Kues* (Hamburg, 1983-) から調査した。

(8) *Nicolai de Cusa Opera Omnia* XVI, Fasc. 0; XVII, Fasc. 0; XVIII, Fasc. 0; XIX, Fasc. 0 より、説教の批判校訂版の作成過程および、クザーヌスの説教原稿の全体像の把握に努めた。

(9) 古典的なクザーヌスの説教研究に加え、2004年10月に開催された *Cusanus-Gesellschaft* の国際シンポジウムの報告書 (*Die Sermones des Nikolaus von Kues, Merkmale und Ihre Stellung Interhalb der Mittelalterlichen Predigtkultur* [Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft 30] Paulinus, 2006) より、クザーヌスの説教研究の現状把握に努めた。

(10) 2009年10月にドイツのトリアで開催された *Cusanus-Gesellschaft* の国際シンポジウムに参加した。また同市にある批判校訂版作成拠点であり、今もクザーヌス研究の国際的中心である *Cusanus-Institut* を訪問し、批判校訂版の作成に当たったドイツの研究者との間での連携を図るとともに、資料収集を行った。

4. 研究成果

(1) 1430年の説教1から1441/45年の説教26の考察から、彼の一性概念の推移を以下のように見ることができた。一性概念とそれに関わる「相等性」「同一性」の概念は、当初から説教中の三位一体論に関わる論述のなかで多用される。しかしが、一性概念には「協和的一致」を導く原理としての一性の意味内容が重視されていた。しかし、その原理性とはもすれば協和の総体においてのみ機能するものであるという傾向性を持っていた。だが1440年12月25日の説教22では、一性の絶対性が強調され、数多からなる協和的一としての全体性を開く根源として、協和的一に優越する位置付を一性に付与するに至っている。この説教原稿に見られる一性概念の内方変容は、*De concordantia catholica* に見られるヒエラルキー的構造を持つ世界の「協和における一性」から、*De docta ignorantia* における世界の数多性からなる一性を「超越した一性」へと「一性」のアクセントを移行させていることとの並行関係を確認した。さらに、彼の政治的立場は、1436年に公会議派から教皇派に転向しているが、具体的な公会議での状況とともに、この一性概念における超越性の強調が、教会において「数多からな

る一」である公会議に対する教皇が優位性を持つ、という理解につながっていたことも類推された。

(2) 著作のみならず説教の全般にわたりクザーヌスが問題とする「一」と「数多」についての思惟のなかで、しばしば見られる新プラトン主義者・実際にはプロクロスと自身の差別化について、クザーヌスがどのように考えていたかを、*Proklus Latinus* のテキストにまで遡って考察した。その結果、クザーヌスはすでに修学期(10代後半であった可能性もある)に、本テキストを所有し、欄外にメモや符号を付けながら、これを丹念に読んでいたことが分かった。さらに、自らの立場を偽ディオニュシオスに重ねつつ、プロクロスの一性理解を凌駕していく努力が見受けられた。その努力は、*De genesi* に見事な仕方で開花していた。説教に散見される、一性についての二つの相反する一性理解を *De genesi* でクザーヌスは並置する。すなわち、プロクロス的に「一性の分有不可能性」と、「分有されうるもの」を内包した一性理解の並置である。これは新プラトン主義的一性理解をキリスト教的一性に置き直す自覚的な努力であり、これによりクザーヌスは「一性は同一性である」というテーゼを掲げること成功した。

(3) 一性を、相等性、同一性概念を用いて、自己意識的な三一的構造、三位一体論の哲学的説明として提示することを、クザーヌスは説教では最初期から行っている。これは、アウグスティヌス、ボエティウス、シャルトルのティエリーの思惟を受け継いだものであるが、ティエリーについては——ティエリーのボエティウスの諸論文についての註解に見られる——用語レベルからこれを受け継いでいることは、各批判校訂版テキストの欄外注から詳細に確認することができた。またクザーヌスがティエリーをきわめて高く評価していたことも、1449年の *Apologia doctae ignorantiae* の文章から確認しえた。

(4) *De genesi* で、一性を同一性と同定するにあたって、クザーヌスは根源的一性に「分有されうるもの」を組み込むが、その際に彼は、「分有不可能なもの」「見えざるもの」が、自らを「分有可能なもの」「見られうるもの」にする、という見解を取る。超越的で世界内的な数多なものともいかなる関わりを持たない新プラトン主義的一性は、自らを、分有関係の根源としての一性となす。その時点で、一性としての神は新プラトン主義的超絶性を持つものとしては常に「隠れたる神」であるが、分有関係の根源としての神は、根源として分有者において自らを顕現させる。

(5) この知見の上で初めてクザーヌスは、前期には「隠れたる神」としてあった神を、後期には創造根源として被造物において「顕

現する神」として主題化しえた、という確証を得た。つまり「可能現実存在」「非他者」「可能自体」といった、いかなる世界内的存在者にも限定された仕方で当てはまる概念の最高の実現として神を主題化し、その名称でもって神を名指す、という後期著作における彼の思索は、「分有不可能者の分有されうる者への自己変容」という思惟があって初めて可能になる、ということである。

(6) *De genesi* における「創造根源としての一」という思惟は、同年(1446年)8月15日に行われた説教71には、別の一性概念で主題化される。そこには「必然的一」(*unum necessarium*) が鍵概念として使われている。*De docta ignorantia* 等の著作において「必然性」は——ティエリーより受け継いだものだが——、まずは神の三位一体における聖霊・愛による父と子の結合の必然性として扱われ、個々の被造物、また宇宙全体が「同一的一」であるための言わば靱帯的な機能を果たす概念であった。しかし説教71においては、「必然的一」は偶存的・被造的一が存在するための創造根源として扱われている。偶存的存在者の根源として必然的存在者を立てる思惟は、アヴィチェンナおよびスコトゥスに顕著なものである。「同一的一」ないし「分有されうるもの」を含みこんだ一として根源的一を考えたクザーヌスの思惟には、アウグスティヌス—ボエティウス—ティエリーの同一性概念の伝統のみならず、スコトゥス的な存在概念理解が影響を与えていたことが、ここに見て取ることができた。

(7) 「著作」には影が薄く「説教」に頻繁に出てくる単語として、「墮罪」がある。墮罪により、諸元素が乱れ、宇宙・被造的世界のあるべき協和が乱されている、という論である。これはイスラムの脅威に対応しつつ教会改革を推進していこうとする彼の、聴衆に対する現状刷新のメッセージとなっていく。キリスト教的新プラトン主義の体系は、説教では、創造論のみならず、救済史的枠組みのなかで機能している。

(8) 一性を同一性としたキリスト教的新プラトン主義的体系を救済史的枠組みのなかで語るにあたり、クザーヌスは、アリストテレス—トマス的ハビトゥス論を用いる。ハビトゥス形成が現実態・活動に向けてのものであることから、究極的な現実態性としての神はすでに非対象的な仕方で現象していることを強調し、その上で、あるべき協和的世界に向けてのハビトゥス形成を醸成していこう、とするのである。

(9) クザーヌスにあってハビトゥスは言語と関わり、一個人のもののみならず、言語集団的なレベルで捉えられている。人間の自らの帰属集団のハビトゥスの絶対化——これこそが原罪の結果である——が世界の不和

の直接の原因である。世界の協和的一致の実現のためには、非対象的に顕現している根源的一に対して自己のハビトゥスを相対化する必要がある。これは、1453年の *De pace fidei* における宗教寛容論の理論的基礎付けとして見事に機能する。クザーヌスの体系的思惟と根源に対する考察は、教会刷新と、フス派の問題、対イスラム政策に腐心する彼の実人生上の問題解決の理論的基盤であることが、説教資料から提示されることとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 佐藤直子「クザーヌスとプロクロス」：新プラトン主義協会『新プラトン主義研究』第11号、掲載決定、査読有(2011年入稿。出版母体の都合により、2011年発行予定であったものが遅延。2012年度中に発行の予定)。
- ② 佐藤直子「中世における信仰と知」：上智大学研究機構『2011年上智大学研究機構フェスティバル研究企画・研究成果報告書』2011年、57-58頁、査読無。
- ③ 佐藤直子「クザーヌスにおける宗教寛容」：日本宗教学会『宗教研究』第367巻、2011年、99-100頁、査読無。

[学会発表] (計3件)

- ① 佐藤直子「クザーヌスとプロクロス——『創造についての対話』を中心に——」：日本クザーヌス学会、2011年3月5日、於、早稲田大学。
- ② 佐藤直子「クザーヌスとプロクロス」：新プラトン主義協会、2010年9月26日、於、鹿児島純心女子短期大学。
- ③ 佐藤直子「クザーヌスにおける宗教寛容」：日本宗教学会、2010年9月4日、於、東洋大学。

[図書] (計1件)

- ① 佐藤直子「クザーヌスにおける信仰と知——*De visione Dei*における“私”の成立——」：上智大学中世思想研究所編『中世における信仰と知』知泉書館、掲載決定(2010年度入稿。編集母体の都合により刊行時期が遅延。2012年度刊行予定)。

[その他] (計1件)

- ① 佐藤直子「中世における信仰と知」：2011年9月31日、於上智大学、上智大学研究機構フェスティバル・研究企画ポスター発表。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 直子 (SATO NAOKO)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：60296879